

私の成長

山形県村山市立楯岡中学校

三年 佐藤 薫 子

「そんなの楯中柔道じゃない！ そんな勝ち方は柔道じゃない、攻めて勝つ！ 攻めない勝ちはずだ!!」その日の悔しさを母にぶつけるように、私の言葉は止まらなかつた。おさまっていた涙がまたあふれ出てきた。

私は中学校の部活動に柔道部を選んだ。柔道ではテレビでも見たことがなく全くの未経験。柔道どころか、体育の授業以外のスポーツ経験もなかつた。

その二年後、私は中学最後の地区総体で優勝し、県大会の試合に臨んでいた。

タイマーを見る余裕はなかつたが、残り時間はきつと十秒ぐらい。このままなら有効と技ありを取っている自分が勝ちだと分かっていた。あと五秒、四秒……。相手が体勢を崩した。寝技に入れると思ふより先に体が動いたかは、もう分からぬ。私は相手の下にもぐり込もうとした。その瞬間、私が畳に押しつけられていた。「しまった」と思い、もがいた。必死にもがいた。嫌だつ、負けたくない、心の中で叫んでいた。押さえ込みの二十秒のカウントは、あつという間なのにも関わらず一生抜けられないかと思ふぐらい長く感じられた。私の柔道の日々は、幕をおろした。

そのまま閉会式まで、泣き続けた。帰宅しよう

やく落ちて着いた時に母が聞いてきた。

「あの時なんで押さえられたの?」

「寝技にしようとした」と答え、

「えつ、あと三、四秒やり過ぎれば勝つと思わなかつたの?」と母が言い終わる前に、私は怒鳴っていた。

「そんなの楯中柔道じゃない!!」

残り時間は一秒だつたことをコーチから聞いていた。あと一秒、ただ立ってれば私は勝つた。でもそれは絶対にできなかつた。私に初めて熱中することを与えてくれた、信じられる大人に出会わせてくれた、私を認めてくれた柔道で、そんな勝ち方をしても私はコーチの顔が見られなかつた。「攻めて勝つ」はコーチの教えだつたからだ。でも、あと一秒……。勝ちたかつた。絶対に勝ちたかつた。

柔道部に入部したいと言つた時、母も祖父も反対した。中学校は新たな人間関係に不安がいつぱいなのに、女子柔道部は三年生の先輩が一人だけだつた。同級生と一緒に柔道部に入ってくれる女子は誰もいなかった。

私自身も、一人で柔道部の見学に行った時に、体の大きな坊主頭の男子部員を見て、とてもこんな人たちはやつていけない……。やつぱり美術部にしよう……。と心の底から思つた。その状況で、入部を得意できたのは、未来の自分が導いたとしか考えられない。

チビの私は、男子との練習は記憶がなくなるほどキツかつた。初めて脱水症や脳震とうで倒れ、ケガもたくさん、歯も失くした。

それでも柔道は楽しかつた。コーチのような強くてひきこまれる柔道をしたかった。コーチのような強くてひきこまれる柔道をしたかった。

辛かつたのは、孤立感だつた。女子の先輩が引退した後、私は男子の中にうちとけられなくなつてしまった。他の部の男子から寝技の練習をからかわれることもあつて、私と組み合つてくれる人もいなくなつた。

なつた。

また、男子はふざけてだつたのだから、技の練習の延長で私をけつたりたたりたりすることも度々あつた。荷物にいたずらされることも頻繁になり、私は笑つてやり過ぎせなくなつていった。もう部活動が嫌になり、本気で転部を考え悩んでいた私を支えてくれたのは、家族と二人のコーチだつた。

コーチはいつも私の存在を大切にしてくれた。試合で負けた時でも、動きが良かった、教えたことがちゃんとできていたと、いつもたくさんのお褒めをしてくれた。私をちゃんと見てもらっている、一つ一つの言葉がとても嬉しくて、涙がこぼれそうな時もあつた。

男子にも、薫子は大事な仲間なんだと何度も話してくれて、私は柔道に集中することができ、私と男子の間にもだんだん本物の絆ができていった。翌年には女子の後輩もできて、柔道は私の一番の居場所となつていった。

中学最後の試合は男子の仲間と一緒に東北大会に出たかつた。一足先に私が部活動を引退する日、もつと皆と柔道がしたいと切なくなつた。そしてコーチがくれた、

「薫子の柔道からはたくさん感動をもらった。人はこんなにも成長できるんだということを教えてもらった。柔道は、道だから。終わりはない。薫子の道は終わらないぞ。」という言葉に胸がいつぱいになった。

この選択が正しかつたのかと、思い悩んだことは何度もあつた。今は、私の人生において柔道はかけがえないものだ、迷いなく言うことができる。柔道を通して初めて知つた達成感、自分の限界を乗り越える精神力、周囲への感謝の心。そして、厳しい練習を共にした仲間、出会えた人々。どれもが、これからの私を支えてくれることだろう。

作文を書くに当たって

中学入学とともに足を踏み入れた柔道という新しい世界。柔道を通して実感できた仲間との連帯感、達成感、勝利の喜びや悔しさ。そして、柔道を通じた人々との出会い。全てかけがえない、私の宝物です。私に初めて熱中することを教えてくれた柔道への思いを込めて作品にしました。